

「教育課程論」 通信

vol.02

2コマの流れと記録

12:45, L205の入り口でわちゃわちゃ。学生証をかざし、この通信(vol. 1)とグループ分け表を受け取るや否や確認するは課程論通信、ではなく当然自分のグループと席。10月16日(月)はあらかじめ決められた4人からなるグループごとにかたまって座る学習形態でした。全員のことを互いに見知っているわけではない約170人でしたが、ワークを通して、互いの意見や考えに頷いたりつつこんだりしながら、自分の考えや思考を深め、学習指導要領の変遷と現在を具体的に捉えることができました。

早速グループで、4つの社会科の授業案をみて年代の古い順に授業を並び替えるというクイズに取り組みました。苦戦しながらも、学習指導要領の影響が授業の違いに込められていることを実感しました。1類2年生の好みとしては経験主義の時代の授業案である「う」が多かったです。「あ」と「う」の違いを授業の「目的(何を狙っているか)」「内容(何を学んでいるか)」「方法(どう学んでいるか)」の視点で検討してみました。そして、時代は経験主義から系統主義へ移行、「知識体系の詰め込み」問題や「ただの体験的学び」問題を回避しようと、それぞれの時代での反省を繰り返していきながら、振り子の状態で少しずつ前進していくようなイメージであるということへと思考をつなぎました

子ども中心主義のような授業にはどうしても教師の力量がより必要になってくる。「よい授業をしたい」「躓く子どもを救いたい」というイメージだけをもってやっていると、「自分ひとりてがんばる先生像」になりがちで、組織で育てていくという目線になかなかなりづらく個も疲弊しやすい。だからこそ、大きな「カリキュラム」として捉えられる目線をもっていただろうがよい！そんななかで、じゃあどうやってたくさんの人、いろんな人がいるなかでやっていくのか、次回以降に引き継がれます。



講義室 L205 (出入口側半分)

学生のふりかえりコメントより

～ふりかえり①と②に対する学生コメントをいくつかもってきました^^～

①どの授業が魅力的に感じましたか？

私は西条先生の「昔と今の乗り物」に魅力を感じた。それは、調べたり話し合ったり、作文や劇にしたりといった、知識を学ぶ座学に終結しておらず、楽しそうだと感じたからである。しかし、ただの座学に思えた「世界の気候」の授業が思っていたものと違っていたように、経験主義的な授業展開だということ、楽しい授業であるとは限らないと学んだ。教育課程と授業は同じではないということも理解して、どのように授業の中身を組み立てていくかが重要であり、そのうえで、「昔と今の乗り物」の授業を展開できれば、非常に魅力的な授業を作れるのではないかと感じた

私は野菜作りの授業に魅力を感じた。この授業の特徴として問が多いと感じた。どうして～なるの？という問いによってより児童が考えることが多くなり、知を練り上げることにつながると考えた。また考える力を重視していることで主体的対話的で深い学びができる授業になっていると感じた。教育課程の変遷の中で変わっていった結果学び手の関心を中心とし、主体化された授業であるためこの授業を選んだ。

世界の気候、鈴木生気先生の実践は系統主義教育のなかでされているものであったが、実際の授業は子どもに問いを投げかけるというような子どもとの対話を行っていた。これは、知識を教えるだけの授業ではない。命題8のように教員の力量で子どもたちのための授業をする必要があると考えた。「知識があっても生活がない」ことにならないように、子どもたちが主体的に学ぶ姿勢を持てるような授業構成にしたい。

私はエの黒柳徹子さんが受けられた授業に魅力を感じた。この授業は確かに今の教育体制では難しいと思うが、ギフトの子など何かからの事情、制限がある子にとっては1つのよりよい選択肢になると考える。自分自身の興味関心に合わせて学ぶことで大人になっても役に立つ「真正の学び」に近づくとし、将来社会に還元するためには、自分自身の強みを活かすことが大切だと考える。これらの授業を実践的に導入して、この授業の形の振り子を揺らし前に進めていけば良いのではないかと考えた。

②もし、「最近の若者って、学力低いよねー」「基本的な知識を学ばないで話し合いばかりしているからじゃない？」というオトナがいたら、どのように反論、あるいは別の視点を提供しますか？ 命題の発想を利用して説明しましょう。

同じ経験主義的なものでも、「野菜作り」の事例のように実際に体験することでいいところから、子どもの学びを納めていくような授業、その視点も意味と大事ですね…

これは子どもが主体的に勉強し、自分の力で0から新しいことを学び、身につけようとしている途中である反論する。これは、ただ知識を得るだけではなく、学んだ知識を活かして社会の中で自分の役割を果たせるようになり、ただ勉強ができるだけの人間ではなく、これまでの勉強を活かせる人間になれるのではないかと考える。

学力観というのは時代によって変遷していくものである。確かに基礎知識は大切であり、疎かにすべきではないが、情報化が進んだ今、知識や技能の多くはコンピューターの得意とする分野となった。では、人に求められる力とは何か。それは、新しい知、概念の創造、課題解決能力である。これが今の学力を図る指標になりつつある。そのための話し合いであったり、アクティブラーニングである。さらに付け加えるのであれば、話し合いができるということは、知識を応用しているということであり、身につけている証拠である。

命題5から分かるように、教育の歴史を振り返ると、時代または社会に求められるものに応じて教育は変わってきました。そして、各時代での反省をいかして次に進んでいます。今、教育の根幹に「主体的な学び」があるのは、それが求められる世の中だからです。グローバル化が進む社会で、多様な人のコミュニティが生まれました。多様性を許容できる社会、人材の育成のためには、多様な価値観を知る必要があります、そのためには教育において主体的に学び、考え、他者と交流することが必要なのです。

色々な反論の切り口はあったものの、時代で変わらなれている「学力観」が驚かすことと、実際の学校現場ではあれだと感じると、そのときに同じように反論していく必要があるのでは？

編集後記

カリキュラム、教育課程、授業について検討・分析したりするときに、一教師の視点からだけでなく、子ども・保護者・企業人・地域・国などのあらゆる視点の声を想定して分析しているのが印象的でした。それが延いては、自分たちの学校として意図したカリキュラムをそのような人たちに納得がいてもらえるように説明できるかどうかにかかると感じます。というも、自分たち(その学校、教師)の論理だけで説明、反論するとかえって逆効果になったりする場合もあるので、あくまで一度相手の懐(文脈や状況)に入り込んで、相手の論理のうえに反論することが大事なのかなあと思ったり、思わなかったり。また来週!

【制作・編集 馬越々椰(教育課程論TA)】

南浦先生の今日のひとこと

私たちは多くの場合「授業」を見がちです。でも、その背後にどんな「カリキュラム」があるかを見ることは大事です。

「いい授業」は「カリキュラム」を乗り越えていくのか、「カリキュラム」は「いい授業」を越えてくるのか？ みなさんも考えてみてください！